

〔論文〕

経済開発の寓話

—グアテマラ・クチュマタン高原のコミュニティからの通信—

池田光穂

Be All Abroad in Guatemala:

An Note on Economic Development of an Indian Community in

Cuchumatán Highland.

Mitsuho IKEDA

Summary

This paper discusses the issue related to economic lives of a Mayan indigenous community in *Cuchumatán* Highland, Guatemala, Central America. The Guatemalan people have been suffered by the political violence, *la violencia*, between the state-sponsored army and the left-wing guerilla groups, during over thirty six years from 1961 to 1996. Under the globalizing economic process the people have been changed diversely their surviving strategies articulated their own domestic lives to the economic activities which newly trench into the communities, e.g. the flush of U.S. dollars into the community by sending immigrants. Each episode on their economic lives has significant allegorical meaning for cultural anthropologists who are concerned with the socio-political meaning of the economic development of local indigenous communities in globalizing context. The author also examines the social use of the allegory of these episodes presented in this article; the etymological significance of 'allegory' means 'a representation that interprets itself.'

キーワード：マヤ系先住民 (the Maya)、マム (the Mam)、グアテマラ、国際労働移民、
経済開発現象、寓意、フィールドワーク、文化人類学

KEYWORDS: the Maya, the Mam, international labor migration, economic development,
allegory, fieldwork, cultural anthropology

目次

1. はじめに
2. 北米（ノルテ）で金を稼ぐ
3. 三名の先住民〈像〉

4. 資金あふる社会
5. 後ペンハミン記
6. まとめ：俺に仕事を斡旋してくれないか？

**

「私はありふれた旅行記の形式と一線を画したことで、非難を受けても弁明するつもりはない。というのも、私は公平な眼でものを見てきたと考えているからであり、思慮分別があるかどうかはともかくとして、少なくとも正直に書いたと確信しているからである」。

マーク・トウェイン 1869年 [1997: 1]

「フォースの暗黒面に囚われてはならない」。

オビワン・ケノービー 1977年

1. はじめに

私は本稿において、中央アメリカにあるグアテマラ共和国の西部に位置するクチュマタン高原のマヤ系先住民共同体（S町）における、社会と経済の発展に対する人々の考え方と彼／彼女らのアイデンティティとの関わりについて報告したい。私の年来の関心は、この地域における「政治的暴力と地域の開発現象の関係を明らかにする」[池田 2002:49] ことにあり、これまでの私の拙い諸論考 [池田 1997, 1998, 2000a; Ikeda 2000b] と極めて密接な関係がある。

私が1996年末におこなった調査の際には、政府と反政府勢力の和平合意があった。この当時の、人々の生活意識についての会話の中では、共同体の経済活動が活発になり、生活が変化しているという指摘が、数多く聞かれた。中でも特に「今日びは競争が厳しい」(*Hoy hay mucha competencia*) 「1ケツアル——グアテマラの通貨単位で15セント米ドル相当——でも儲けたい」(*Aun un Quetzal, quiere ganar*) 「この町では誰もが商店や商売をもちたい」(*Aquí cualquier persona quiere tener su propio negocio*) という商業活動についての発言が多くのも場で聞かれた。また、この町に観光が高じて半ば定住したり、定期的に調査する外国人に対して、人々は自分たちの企てに「投資」してみないかという誘いを積極的にかけることや、実際の投資話も聞か

れた。

拙稿の目的は、そのような種々のエピソードを経済開発の寓話 (fable) として理解し、その背景に潜む民族誌的寓意 (ethnographic allegory) を社会経済開発をめぐる公的な議論の場に持ち込むことの意義について検討することにある。これまでの〔文化〕人類学の学問的パラダイムにおいては、さまざまなテキスト論批判や政治経済的文書という観点から民族誌の位置づけに関する批判 [e.g. Clifford and Marcus 1986] が試みられてきたが、それらの検討材料は人類学におけるマスターナラティブともいべき民族誌テキストであった。また、民族誌それ自体がもつ寓意性に関する理論的に洗練された議論 [クリフォード [Clifford] 1996 [1986]] であった。他方、本稿では取り扱う材料そのものは私が採集した資料に基づくものであり、また私自身がおこなう寓意の提示もそれほど洗練されたものではない水準に留まっている。しかしながら、たとえ自作自演であれ、このような形で私が考えてみたい物語を、未来の私をも含めた本稿の読者に伝え、時に啓蒙主義でカモフラージュした植民地科学と言われてきた民族学や文化人類学における民族誌記述というものを、今日の脱植民地化の文脈にどのように位置づけるのかという学問的議論 [e.g. 太田 2003] に僅かでも貢献したいからである。

2. 北米 (ノルテ) で金を稼ぐ

グアテマラ共和国ウエウエテナンゴ県のクチュマタン高地西側の谷間にある標高1,000メートルから3,500メートルに位置している人口約2万人のこの自治体 (*municipio*) は、ここに住むマヤ系インディヘナの生活を見にくる外国人観光客にとってはよく知られている。面積およそ300平方キロメートル、高度差が2,500メートルもあるこの地域にやってくる観光客は、正確には人口約3,000人の役場がある町だけにやってくる。1998年当時、この町には4つの宿屋とNGOの語学学校 (PLEM) があって、推定で年間4,000人以上の宿泊観光客が滞在していた。

この町がなぜ、そしてどのように民族観光の目的地として発達してきたか、という疑問に答えるには、この町の政治経済的背景を押さえておく必要がある。この町は、少なくとも1945年の時点ですでに太平洋岸のプランテーション

ンへの出稼ぎ労働が行われており、外部経済との深い繋がりは形成されていったと推測される [池田 1998:68の図表参照]。

出稼ぎ労働は、プランテーションの所有者または代理人と密接な関係をもつ土地出身の労働周旋人——“*caporales*”、より一般的には*habilitadores*——によって仲介される。プランテーションへの移動は1950年代に主要幹線道路からの支線の開通以来格段に便利になり、その規模も大幅に増加した。出稼ぎ労働には1960年代の中頃からは隣県のコーヒー農園への維持管理やコーヒー摘みなども加わった。さらに1970年代に入ると、同じ町内の低地でもコーヒー栽培が始まるようになり、賃労働のオプションは拡がり、太平洋岸低地のプランテーションだけに特化する傾向は減少した。

1981年の初頭「貧民ゲリラ軍」(*EGP, Ejército Guerrillero de los Pobres*) がやってきて、同じ年の夏まで町を占拠した。その後、ゲリラ掃討のためにグアテマラ国軍がやってきて、1982年3月23日のリオス・モント将軍のクーデタの直後まで駐留した [池田 2004:127]。ゲリラもグアテマラ国軍の兵士たちも、査問、拷問、人民裁判や公開処刑、虐殺などの一連のテロリズムを日常的な統治手段としたため、多数（推計では約200名）が殺害され、多くの人々が周辺の山林に潜んだりプランテーションへと移住し、実質的難民化した。つまり、その間、町は一時ゴースタウンと化して、あらゆる社会経済活動が停止した。

この町の終末論的な危機から徐々に人々が社会的活動を再開する過程のなかで、1980年代中頃以降の観光客の増大、モハード (*mojado*、不法渡航者が米墨国境のリオグランデ河を渡る譬えからきたスペイン語、英語ではwet backという) と呼ばれるアメリカ合州国への移民労働の増大などで経済状況は1999年末には活況を示すようになってきた。1988年に2ヶ月あまり滞在し、その約8年後に再訪した際に、私が町の景観をみて驚いたのは様変わりした町の風景であり、とくにコンクリートブロックでできた大きな2階建ての新築の家の数々にあった。人びとは口々に、その新しいマンションの主の息子がアメリカ合州国で働き、それらの送金によってできた御殿であることを、羨望をもって語っていた。その時に、人々は集団の自称である「○○町人」という呼称を使う以上に、「我々グアテマラ人 (*Somos guatemaltecos*)」とか

「我々先住民族 (*Somos Indigenas*)」という表現をよく使った。また「自分たちは(メキシコ人に比べて)働きものなのだ」という言葉がよく聞かれ、不法移民のアメリカでの経済的成功が、彼ら自身の資質と努力の賜であると説明することが私にとって印象的であった。

以下は比較的初期にノルテ(北米のこと、後述)に渡航した男パンチョ[仮名](ただし彼は同郷のマヤ人たちと渡航したラディノ[混血]である)のエピソードである[インタビューは1998年7月]。

【ラディノのパンチョ】

私は1990年から10カ月アメリカで働いたことがある。アメリカ行きのきっかけは、従兄弟に誘われたからだ。渡航にかかった金は、当時で800ケツアルだった。その内訳は、400が運賃で、400がコヨーテ(後述)への手数料だった。コヨーテは、この町にもいて、いつも宣伝をして顧客をあつめている。私の場合は、コヨーテはウエウエテナンゴにいる奴で、もちろん近隣の村々にもいる。

(アメリカ)合州国の国境まではバスで1週間かかった。つまり、月曜に国境の町メシージャを通過して、アメリカのサン・イシドロについたのが次の月曜だった。途中のメキシコでは、いたるところに検問所があって、メキシコの係官はことあるごとに、(労働移民である)我々から金をせびっていた。もちろん、すべておめこぼしのための賄賂の金であるが、我々にとっては泥棒と変わらない。

(先住民の男性Jが政治的理由でアメリカに逃げたのではないかと質問すると)そんなことは絶対にありえない。アメリカに行く奴はすべて金のため(*todo por dinero*)で、政治的理由などすべて嘘っぱちだ。

アメリカのカリフォルニアにはエルサルバドル人のための法律事務所がある。弁護士を中心としていろいろな人がいて、同国人の相談にのっている。そこで、私が聞いた話では、合州国当局に申し立てするときは、出身国にいた時に身の回りに政治的危険性があったとか、親類縁者が暗殺されたと言うことをすすめるらしい。

確かに、この町でも1982年以前には政治的問題がたくさんあったが、それ

以降はほとんど問題がない。もしJの親が殺されたとしても、現在の彼の[政治的]危険性には関係ないよ。すべて金のためだ。

アメリカでの生活は、仕事はきつい。食事も高い。そしてアメリカまでの旅も厳しいので、もう二度とアメリカには行かない。この町(故郷)で生活できることが一番いい。

アメリカ生活で最も楽しかった経験は、ヨセミテ国立公園に行ったことだ。従兄弟は、まだアメリカにいるが、その時に誘われて行ったが、ヨセミテは公園そのものが美しいし、鹿がそこまで来て「警察」が鹿を殺さないように見張っている。他にアルカトラス島にも行ったが、ヨセミテが一番よかった。

アメリカ行きは大変だが、帰りは楽である。移民局(ミグラ、*migra. migración* つまり移民の略語)に行って、自分が不法入国者であることを宣言すればよい。立派なベッドのある収容所に入れてくれるし、食事の心配も不要だ。おまけにグアテマラまでちゃんと送り返してくれるからだ。

アメリカ(合州国)人は、ラテンアメリカの政治難民やテロを受けた家族には、人が良いと言うか、とても甘い。すぐにラテンアメリカの連中の言うことを信じて援助を申し出る。そのような申し立ての半分は本当で、半分は嘘なのだ。エルサルバドルの法律事務所のように、エルサルバドル人の弁護士たちがそのように自分たちの状況を悲惨であったかのように勧めることもあるからだ。

コヨーテという不法移民の旅行ブローカー——冗談まじりに「旅行代理店(*agencia*)」と呼ばれていたが——を使ったアメリカへの移民の規模は、その成功の噂話の村落内における流通と、実際の送金によるドルマネーの流入により次第にエスカレートしていった。また、移民の話やエピソードの内容は、年ごとに行った私のS町訪問の機会のたびに、より具体的で現実的なものに変化していった。たとえば、郵便ではなくマイアミに本拠をおく民間の宅配便業者による通信送金手段の確立。カセット・テープの音声メッセージ(=手紙)とマネーオーダー(“モネイ・オルデル”とスペイン語なまりで発音される)と呼ばれる簡易小切手を入れた封筒を村落に残した家族に手渡す共同集配所への人びとの定例的集まりが生まれたこと。他の集落からやっ

てきたよそ者のコヨーテの利用から地元の「少し値は張るが安心できる」コヨーテの営業開始のニュースがあった。このような好ましい話がある一方で、他方では、帰国者の村落内での大盤振る舞いやどんちゃん騒ぎに人々が眉を顰めたり、若者の伝統的な社会慣習の放棄による保守的な人々の非難、アメリカでのアルコール中毒や現地での重婚やさらには音信不通など失敗のニュースや噂話など、好ましくない話も多く聞かれた。さらに、村落ではノルテ（スペイン語で「北」の意味）行きのために事前に準備する人たちが、メキシコを通過する際に、いかにメキシコ移民局の邪悪な係官の検査から逃れ、自分たちがメキシコ農民であるかを偽装するために、発音上のアクセントの修正やメキシコの先住民大統領の名前や国家の暗唱などを学ぶ場面に直面したことがある。

以下は先のパンチョの渡航時期から約5年後に渡航したマヤ人の若者の経験である。話の内容が詳しいという特徴があるが、移民の移送ルートや方法が洗練され、また受け入れられたアメリカ領内での仕事のあっせん業務などがより組織化されていることが窺えるエピソードである。

【食肉工場のファン】

ファンは1995年1月にアメリカに行こうと決心した。ちょうど、その3カ月前の94年の11月に、弟のマリアーノがアメリカに行っている。ノルテ（Norte、合州国のこと）へ行くことが「自明の事柄ではあるが」お金になるということのコヨーテあるいは弟をふくめたS町の周りの人たちから聞いていた。渡米の決心は、コヨーテによる説得が大きく占めていたが、また先立つ金がなければ、渡米に踏み切れなかったのも事実である。

コヨーテは、サンベドロ出身の男で、S町にやってくる、渡米希望者の若者を集めた。渡米にかかる費用、つまり彼に渡した額は5,000ケツアルである。現在では8,000あるいはそれ以上になるという。渡米のための金は、父親などから借りて工面した。

S町から、このコヨーテと共に渡米した連中は9名いた。

95年1月にグアテマラから出発して約2週間で北米に到達した。

グアテマラからメキシコへは、メシージャの手前で山道に入り国境を越境

した。メキシコ国内ではトラックの運転者に交渉して有償のヒッチハイクをおこなった。ところがオアハカで、コヨーテを失ったホンジュラス人たちの8名のグループに遭遇し、ファンたちを先導していたコヨーテは、彼らも一緒に引き受けることにした。この17名の旅行者に対して、コヨーテは「君たちの食事を買ってくるよ」と言ったまま、もう戻ってこなかった。結局、ホンジュラス人たちのグループとS町のグループは別々になって行動することになった。当然のところながら、彼らがその後どうなったかは不明である。その際にファンの手持ちの所持金は2,000ペソ（メキシコの通貨単位）ほどだった。メキシコを旅行中のファンの気持ちは、はやくもグアテマラの故郷に帰りたいというものであった。

S町の一行は、トラックによるヒッチハイクで、アカプルコまで出て、そこからノガーレスを経由してアメリカ合州国に入国した。ノガーレスにつけば、そこにはコヨーテがたむろしており、[彼らはコヨーテの中には酷い連中もいることを知っているにも関わらず]最初に出会ったコヨーテを使って国境越えを敢行した。コヨーテはメキシコからアメリカに入ってから、テキサス州の町まで連れていってくれた。そこからは、もう移民局の係官から調べられる心配もなく、安心して米国内を旅行することができた。テキサスのその町からフロリダ州の町まで行った。そこでは、仕事を探しているファンたちのような連中に、仕事の口をさがすコントラティスタ (*contratista*, 労働請負業者、労働ブローカー) たちがおり、彼はそのままオレンジの農場で働くことになった。

ここでは、最初の数カ月を同胞と一緒に生活をともにして暮らした。果樹園での仕事はきつく、雨に濡れながら仕事をするのはとても辛かった。この時期には、すでに月額350ドルほどをグアテマラに送金している。送金の方法はマネー・オーダーと呼ばれる為替タイプの小切手で、受け取り人の名前を指定して郵便でおくるといものである [キング・エクスプレス (米国の郵送宅配企業) の手紙を心待ちにしていたS町の留守家族たちは、カセット (非識字者の家族のために手紙はテープに録音されている) 以上にこれを期待していたのだ]。

やがて、弟のマリアーノから電話をもらい、彼がそれに先立つ1、2カ月

から働き出したサウス・カロライナの豚の屠殺場兼食肉加工工場に就職口があるとの連絡が入り、車で6、7時間かかった。そこに弟が車（車種メトロ）で迎えにきた。食肉加工工場には300名ほどが働いており、ここでもメキシコ人のコントラティスタを介して仕事を、給料は日給単位で契約するが、週給で支払われた。彼の仕事は夜勤で、屠殺やその後の加工用の機械の洗浄にあったが、合州国の役人が毎日検査にやってきて、その仕事内容がチェックされるので、仕事のできない連中はどんどん首になっていった。その中で、ファンは、職場長の覚えめでたく、契約が途切れることもなく仕事を続けていくことができた。

この時点での仕送りは、月に500から600ドルにもなっていた。

彼が帰国を決めた主な理由はわからない、彼の帰国直前にあった従兄弟の死だったのか、それともすでに帰る準備をしていたのか、あるいはその両方にあっただのかもしれない。

帰国した方法は、まず父親に連絡してS町での出生証明をとってもらいサウス・カロライナの自宅に送ってもらった。次に、旅行代理店で飛行機の切符を買い、そのままアメリカを出国して、グアテマラに3時間で帰還することができたのである。グアテマラはおろか、アメリカの出入国管理の係官はファンに大した詰問もすることなく、ゲートを通してくれたという。帰国したのは、98年10月である。

帰国後は、家族と過ごすことができ全くの幸せであるという。

チャンスがあれば、アメリカにもう一度行きたいかという質問には、肯定的に答え、また家族とならばぜひ行ってみたいとも言う。サウス・カロライナの職場長は、ファンの帰国に際して、「君がここを去ることは残念だ。もういちど戻ってきたら雇用してあげよう」という旨の発言をしている。

流入ドルマネーと、宅地や耕作地の拡大という伝統的エトスが結びつき、土地価格の高騰を生じた（これは投機のための購入ではないので、日本のようなバブル経済現象は生まなかった）。また、大邸宅を構えるという誇示的消費（conspicuous consumption）から外国人観光客相手の民宿、バー、土産物店の開店に投資する者も現れた。もちろん、思いつきの投資と、マーケ

ティング感覚をもった投資では成否の行く末は明かであった。資本主義的なモードの未来予測とそれへの状況対処能力 [ブルデュ 1993] のみならず、グアテマラ国内での景気や外国人観光客の推移を把握し、不測の不景気に耐えるだけの資金的体力が、経済的成功の鍵であった。

そのような一時的な資金の流入が村落内でのアルコールの消費量を高め、少年の非行を増加させたのだという風評が定着していった。少年非行の原因について人びとは、学校の教師が子供たちをきちんと教育しないからであると糾弾し暴動寸前に発展したことがあった。その時たまたま少年非行グループのリーダーがアメリカ合州国帰りの青年であり、小学校の先住民の教師——彼は海外旅行の経験もあり物知りであることから「人類学者」(*antropólogo*) のニックネームを人びとから頂戴していた——の息子であったために、小学校教師を諸悪の根元と指弾する暴徒がリンチ未遂事件をおこしたこともある。この暴動を止めに入ろうとして失敗し逆に暴徒による返り討ち寸前の経験をしたのは、村落の元町長であり、彼は足機織を所有し、当時は行商のマネージをおこなっているプチブルジョアであった。元町長は1970年代初頭のグアテマラ革命崩壊後の反動政権時期に少年期を迎え、北アメリカに本拠をおくメリノール修道会が支援した初期の奨学生であり、村落の近代化の洗礼を受け、またそれを推進した1人であった。

このようなエピソードは、ドルマネーを中心とした〈外部〉からのさまざまな経済的ならびに文化的干渉に対して、伝統的なパターンで対応したことによる一時的な混乱と、その後引き続き〈外部〉との再調整の社会過程とみなすことができる。もちろんその再調整過程は、ここで述べたように非常に神経質で性急なものであった。

3. 三名の先住民〈像〉

以下で焦点化したい3人のインディヘナは1996年当時の、小学校教師のミゲル、宿屋の女将のドミンガ、そして土産物店店員のベンハミン——すべて仮名——である。この3名は実在する人たちであるが、ここでの人格描写は経済開発に焦点化しているために単純化していることをお断りしておく。

【教師ミゲル】

小学校教師のミゲルは30歳になるが、この町のNGOプロジェクトである観光客向けの語学学校の創設メンバーで、町の経済的成長に並々ならぬ関心をもつ野心家である。彼によると、無学で「文盲」（非識字）の父の時代から、初等教育の整備を通して町が次第に開明的になってきたという。彼は教育の恩恵に預かることが、町の発展にあると信じてやまないが、いまだ教育の実権は混血のラディノにあり、バイリンガル教育の不徹底にみられるように、インディヘナのためのインディヘナによる教育の理念の達成には道のりが遠いと指摘する。非営利の語学学校の収益は、町の社会活動に還元されていると主張するミゲルは、住民の米国への労働移民には批判的である。それは人々を金銭への欲望に駆り立て、家庭のモラルを崩壊させる原因となると考えている。ミゲルの弟Jは、大学での政治活動中に軍からの脅迫を恐れてこの町の女性とともに米国へ渡航し、そのまま定住したが、政治的理由という渡航に対してもアンビバレントな態度を隠し切れない。彼は、この町に住み続け、インディヘナとしての自覚をもつことが重要であるという。ミゲルの意見は、私と知り合った10年前にくらべて、より強固になったように思われる。そして、そのようなインディヘナの自覚は、観光客から無自覚に文化的侵略を受けるのではなく、観光客と仲良くつきあうことで達成されると考える。ミゲルとその妻は、比較的裕福で、最近小さな宿屋を開業した。しかし、この町の最も人気のある宿屋の女将であるドミンガが商売を妨害していると、私に不満を漏らした。

【旅館の女将ドミンガ】

ドミンガはこの町でもっとも著名で、町の人々からもっとも力のあると目されている女性である。彼女は調査した当時私と同じく41歳であった。ドミンガは髪結いの亭主とともに、この町で観光客にもっとも有名な宿屋（旅館）を5年にわたって経営している。彼女は非識字者であるが、町の人々にも外国人観光客にも雄弁で、また最近では宿屋で儲けたお金をさまざまな町の公的活動に寄付するようになったことが著名になった直接の原因である。彼女はなかなかのアイデア・ウーマンである。それまで薄暗い部屋を間貸しす

るだけであったこの町の旅館の形態を、見晴らしのよい場所に立地させ、外国人向けに窓が大きくて見晴らしのよいバルコニーをつくったり、それまで観光客は道から覗き込むことしかできなかった、インディヘナの主婦の伝統的な機織りを旅館の中庭で実演し販売をするという工夫によって、この町の観光客の取り扱い方に革命的な変化をもたらした。そして町の外で起こったリゴベルタ・メンチュのノーベル平和賞の受賞（1992年）という出来事、NGOが積極的にすすめるインディヘナの女性の社会的向上運動などの、一連の女性の社会的進出のイメージの渦中にドミンガを位置づける向きも村人の中にはある。突然の経済的成功を成し遂げたのがインディヘナの女性であったということは、とかく町の噂になった。そして、この町の新興の女性企業家となったドミンガは、付近の同業者からさまざまな中傷を浴びることになった。その中には、子供たちを使った強引な客引き、協同組合による運営と詐称する土産品販売、観光客に対して語られるこの町の女性の歴史の正統化（canonization）など、という事実もあり、かつてこの町の人々がおこなったことのない特異な活動が含まれている。

【土産物店員・ベンハミン】

町おこしに深くかかわったミゲルとドミンガに対して、土産物店の店員であるベンハミンは、この事態をより冷静に分析しているように思える。ベンハミンは、現在の仕事に満足しているということもあるだろうが、多大の資金とリスクを犯して合州国に渡航し一発当てることに興味をもたない。また、お金を儲けたいのは誰もが抱く自然な欲望だとし米国への渡航者を非難することはない。ただ、仮に一時的にも留守にすることで、家族が崩壊することを彼は危惧する。彼は副業として別の業者から委託された織物の土産物の仲買をしている。ベンハミンは、極めて細かい利潤の計算をおこなう一方で、その仕事を労働以外に売るのがない「貧しい人々」のために貢献していると言う。ベンハミンが旅館の女将であるドミンガに対して怒るとき、それは彼女が金を儲けていることにあるのではなく、「貧しい未亡人のため」と称して自己の利益をむさぼることにある。彼の話を経験すると、金儲けに甘い話はない、投企話に安易に乗ることではなく、薄利でも着実に儲かる仕事を

やるのが大切だということになる。それは彼の日常の経済的実践と全く矛盾することがない。

経済開発とは、単に観光客のこの町への訪問のみならず、国内外の援助団体を共同体に受け入れたり、民芸品の流通を通して町の人たちの産業生産が向上することや、外国で働いた金銭をこの町に還流させることにある。3名の個々の経験は経済開発についての寓話になりえるし、三人三様のアイデンティティ構築は経済開発の多様性についての寓意にもなる。また3人の経験に耳を傾ける私は、このような寓話の創作を通して、彼らに関わる人類学者としてのアイデンティティ構築に関わっているともいえる。

4. 資金あふる社会

ここで、この町の経済開発をめぐる状況を整理してみたい。

1980年代中頃から1990年代中頃までの町の経済的変貌の大きな要因は、外部からやっていきた外部資金の流入にあったように思われる。資金の源泉は、アメリカ合州国に移民した先住民からの送金と、和平合意前後に大挙してやってくるODAやNGOの援助団体による開発プロジェクトに由来する。

米国にいるこの町出身の移民労働者達が送金する額は、彼らの合州国における生活水準によってまちまちだが、一回におよそ数百ドルが送金されているようである。この額は、グアテマラー人あたりの当時の年間所得がおよそ3,000米ドルであったことを想像すれば、その経済影響力の大きさがわかる。1996年末当時統計は存在しなかったが、移民労働者数はS町の人口の1、2パーセントから8パーセントと私は推定していた。不法移民を高額の費用で請け負うコヨーテにより移民者は急増していたので彼らが出身家族に送金するドルマネーの総額はかなりなものになる。私は1987から88年にこの町に2カ月たらず滞在したが、1996年の再訪でもっとも印象的だったのは、町の家数そのものが増えたのみならず、ブロック造りの二階建て家が多く目についたことであった。人々はブロック造りの家を指して「あの家の息子は今アメリカで働いている」と異口同音に説明した。

流入したドルマネーは家を新築することだけではなく、商売を始める、ト

ラックを買うなどのさまざまな投資行為を引き起こした。土地の値段も上昇したが、土地そのものは投機の対象とはならなかった。ようやく銀行の支所を町に設置すべく銀行の職員が派遣されて調査が行われ始めたばかりであり、貯蓄や投資という考え方は必ずしも多くの人々に十分に馴染んでいなかったかも知れない。しかし、資金の流通により社会が活性化し、より有望な経済活動に投資することが、富を増殖させるというイデオロギーは、この町が、1980年代初頭の暴力による破壊から立ち直らせるために、グアテマラ国内外からやってきた国内ならびに国外の援助機関によって、急速に普及していった。「投資 (*inversión*)」という新しい語彙は急速に普及し、先住民の日常的ポキャブラリーに加わった。顧みすれば、この頃から我が日本でもこの用語「投資」がより現実性を帯びて少しずつ日常生活に浸透していったのではないか。現地ではもちろんこの語は学校教育を通してではなく、定期市が開かれる路地における人びとのうわさ話など日常生活の中で学ばれていったことが特徴である。

さて、定期市は地方でできた農生産物を流通させるという伝統的な機能から、この10年間で中央からの工業生産物を流通させるという機能のほうに大幅に比重が変化したと思われる。定期市は、すでにプランテーションへの出稼ぎの時代においても儲けた金が現地に持ち込まれ現地経済の活況に貢献した。しかし当時ではそれが移民労働者たちの送金によって活況を示しており、その規模はかつてのプランテーション労働によるものを完全に凌駕しているように思われる。

また織物を中心とする民芸品が定期市において取引されるようになり、民芸品産業ともいえる部門が成長した。それにともない民芸品の性格が、自分たちが身につけることを通して「アイデンティティを表象する事物」と、外部にむけて生産される「商品」という二つに分解することをますます促進させた。当時、土地の民芸品である編み物の袋の半完成品が出荷され、この町の圏外で加工をうけた民芸品がグアテマラ国内はおろか北米やヨーロッパにまで輸出されるようになった。そのような意識を彼ら自身が持ち始めている。しかしながら、この傾向は1997年のアジア通貨危機以降、開発途上国の経済が冷え込んでいくにつれて、急速に衰えてゆく。

5. 後ベンハミン記 (のちのべんはみんき)

冒頭に2名の男性の北米(ノルテ)への移民の経験を紹介したが、ここで類似の経験をもつ1人の男性を登場させよう。その男とは「3. 三名の先住民(像)」で紹介した1人で「合州国に渡航し一発当てることに興味をもたない」と思われていたベンハミンその人である。

【ベンハミンと私】

ベンハミンの渡米については、1998年7月からこの町でフィールドワークを開始した時から聞いており、その9月にあったベンハミンの元の雇用主の息子ファンシートの洗礼の時に、パナハチェル(グアテマラ西部高原の中央に位置する湖畔の観光地)に住むドン・ピセンテからも彼の噂を聞いていた。ドン・ピセンテは、当時渡米したベンハミンと電話で話し、ベンハミンが米国の移民局に身柄を拘束された後に釈放され、わずかの許可(*permiso*)期間だけ働くことを許されただけなので、もうすぐ帰るだろうと、私に言った。そのため、98年の暮れにS町を再訪した際に、彼の家を訪れたときに、米国にまだ滞在中であったことを驚いたことがある。

このように聞く範囲では、移民局による拘束は彼にとって受難かと私に思われていたが、99年7月31日にこの町で彼と再会した時に、米国に対する好印象を語っているのがとても気になった。しかし、以下に述べられる彼の渡米話によると、彼が米国に対して好印象をもった最大の理由は移民局による拘束期間中の厚遇によるものであるという、皮肉な現実がよくわかる。

【内容】

彼がこの町を出発したのは、1998年3月5日、メシージャ(グアテマラ西部の国境の町)の手前から、道を折れて国境に面した小さな町グラシアス・ディオスからメキシコに越境した。アメリカに旅立つ前は、多くのS町の人たちが、山中には蛇、熊、虎など動物がおり危険だと言っていたが、実際は山中を歩くだけで、動物などは出てこなかったという。S町から一緒に旅立った道中は全部で17名いた。ソロマのコヨーテに支払った費用は7,000

ケツアル（当時のレートは1ドル＝6ケツアル）、それ以外に5,000ケツアルを準備して持っていった。

メキシコの国境から十数キロのコミタンの町に入るまでに1日、チアバス州の州都サン・クリトバルの町に入るまでは、1日半、ずっと山中を歩いてたどりついた（一般の道路はメキシコの移民局による車両の取り調べがあるので、主要な道路を避けて彼らは移動する）。山の中では、コヨーテがそれぞれの集落でトルティージャや食べ物を売っている場所を知っており、食物を調達してくれる。

サン・クリストバルでは宿屋に泊まり、移動はバスによったりトラックで移動したが、ほとんどはトラックと徒歩（主要な移民局のチェックポイントを越えるため）で移動した。そのようにして、メキシコではおよそ20日間かかって国境のファーレスまで移動した。メキシコ国内で、一度、腕時計や金目のものを盗まれた（所持品を全部やられたのか一部なのか、また被害総額は不明）。

アメリカ合州国ニューメキシコに入ってからすぐに、アメリカの移民局の係官にS町から来た一行は一網打尽に捕まり、それぞれ各自取り調べを受けた。

複数の出身町の不法移民者が、取り調べ担当の係官から事情聴取を受けた。ベンハミンは、入国の目的を聞かれて「自分はアメリカで働きたい」と述べた。取り調べ官は「君の行った行為はアメリカでは違法行為である」と述べたが、ベンハミンは「私はそれを知りませんでした」と答えた。係官は「君はどこから来たのか？」ベンハミン「グアテマラから来ました」。係官「グアテマラは内戦でまだ大変なのか？」ベンハミン「いいえ、96年からは平和になりました」と。その最中、他の取り調べを受けている仲間の返答を彼が聞き耳をたてていると、「グアテマラはまだ政治的に危険な状態にあります」と真実ではない「嘘」の答えが聞こえてきた。ベンハミンは、彼が後に移民局に身柄を拘束されたにもかかわらず厚遇された理由を、自分が正直に移民局の係官に対して答えたことが幸いしたと回顧している。

さらに彼は別室に連れていかれた。そこでは「不思議なことに」グアテマラの大きな地図が貼ってあった。そこで係官は「君は読み書きができるのか」と質問し「少しなら読み書きできます」と答えた。すると「では、グアテマ

ラのどこから来たのか、この地図で示すことができるか？」と質問するので、「ウエウエテナンゴのこの町です。ここです」とウエウエテナンゴの場所を指し示すと、係官——ベンハミンは「この糞野郎 (*cabrón*)」と表現する——はニヤニヤ笑って、再び別室へベンハミンを連れていった。そこで全身にわたって健康診断を受けながら次のような質問を受け、そしてベンハミンは答えた。「お前はタバコは吸うのか」——「吸いません」。「ビールは飲むのか」——「飲みません」。「マリファナやドラッグやったことがあるのか」——「ありません」。

このようにして、出身町からやってきた一行17名のうち、5名はすぐにグアテマラに強制送還され、残りの12名は幸いにもアメリカに残留することができた。ベンハミンによると、これは正直者で身体壮健な者を移民局が選別したからだと思っている。

彼は7日間移民局に拘束されたが、その間に「君は弁護士をたてることができる。弁護士と話したいか？」と質問されたので、「そのようにしたい」と答えたら、弁護士がベンハミンに接見した。弁護士は米国での彼の労働の意志を聞いてきたので、当然働きたいと述べると、弁護士はベンハミンに「君はすぐにグアテマラに戻る必要はない。滞在期間を延長できるように手配しよう」と答えた。結局30日間の滞在延長の許可をもらった。

ベンハミンによると、移民局の収容所はすばらしいところで「3度の食事、タオル、歯ブラシ、"Colgate" (練り歯磨きブランドでグアテマラでは練り歯磨きそのものをさす)、衣服、など全部」を支給してくれた。「メキシコの移民局では、持ち物を全部とられ、拳げ句の果てには殴られると聞いていたけど、アメリカの移民局の係官は、殴るところか我々をととも丁寧に取り扱った」。

ニューメキシコの収容施設を出て、弁護士に相談したら、「ニューメキシコには空港がないので、テキサスのエル・パソから飛行機にのって君の好きなところへ行けばよい」と行われた。ワシントン州に住む同郷の従兄弟に電話したら、シアトルまで来いと言われた。シアトルから3時間車で移動したところにワシントン州シェルトンがあり、そこでS町出身の労働者が多く働いている。彼はそこで滞在中に、メキシコ人の牧師を紹介された。エルサル

バドル人の妻をもつこの牧師は、弁護士に電話してくれて、ワシントン州の移民局に係官と話してくれて1年間の滞在許可書（1999年7月29日まで）——グアテマラ人労働者の間で“mica”と呼ばれている——を発行してくれた。micaの現物を見せてもらったが、ただ単に「Employment Authorization」と書いてあり、1年間の労働許可を記載してあるカードだった。

ワシントン州での労働やアメリカの印象は、ベンハミンに言わせると「最高だった」。彼の仕事は山のなかで*la brocha*（語義はブラシだが、室内装飾用の植物をさす）と呼ばれる草の葉を刈って出荷場に集めることだった。それ以外には、町の花壇を作ったり整理したりした。ブローチャの仕事は、朝4時に起きて2時間かけて山まで出かけて午前中の6時から11時まで働くというもので、給料は日給の出来高払いで、一抱えのブローチャを摘み取ると35セント、総計で50ドルから70ドル程度稼いだ。彼が働いたところでは、50名近くのS町出身の人がいて、そのうちの10名ほどが女性だった。シェルトンでは、ひとつの大きな家を借りて10名ほどが住んでいて、1ヶ月に80ドル支払っていた。彼はモネイ・オルデル（マネー・オーダー）の小切手を切って妻のピセントのところに手紙と共に（夫婦は共に文字が書けるのでカセットではなく手紙を送っていた）送金していた。

滞在期間が切れる前に、モハードして渡米に使った金取り返すばかりでなく、十分に金を稼いだので、帰国しようと決心した。飛行機の切符を買いに旅行代理店にいったグアテマラ行きの切符のことを相談すると、パスポートを要求されたが、自分はグアテマラ人で、これ以外にはないと“mica”の許可証を見せたり、移民局へ問い合わせてもらったりして、切符が発行された。5月24日の夜にシアトルを立ち、ロサンゼルス経由のUA便（ちなみにグアテマラに直行する私もこの便をよく使う）で25日の早朝にグアテマラ空港に到着した。

グアテマラの入国管理官は、パスポートの提出を求めたが、ベンハミンはグアテマラの住民証明書——ふつうは身柄を証明するものを一切持たずに（つまり見つかった時に素性を隠蔽するにもかかわらず）モハードになるのに彼はこの証明書を携帯していたのは異例である——に係官に見せて「私はモハードで、この証明書（*cedula*）しか持っていない」と言うと、女性の係

官はさも困った様子で「さっさと行きなさい」と言って通してくれた。また税関では、彼は一杯の荷物——テレビやビデオや靴などで——を持ち込もうとしていたが、係官に「自分の身の回りのジャンパーや靴、それに子供へのおもちゃのお土産だけです」と告げて、そこを通り抜けて無事帰国することができた。

彼は翌年（2000年）の4月ごろ再びコヨーテを使って渡米し、ワシントン州で働きたいと希望した。4月の渡米は、トウモロコシの植え付けなどが完了する時期を想定しているというふうに語っていた。また、彼は儲けた金でピックアップのような自動車を帰国して買って、それを元手に商売したいという。自動車を購入して運送業に従事するのは、彼によると一番効率のよい——需要もあるし確実に稼げる——手段であると言及した。

移民や難民あるいは人類学者を含む観光客は、恒久的なホーム（dwelling）を一時放棄して、未知のフロンティアにおいてサヴァイバルを試みる人たちである。それに比べてグアテマラ国内の汎マヤ運動 [池田2000a:213] では、ホームに留まり、敵愾心のある隣人や暴力と対峙しながら、それらと粘り強く交渉を通してサヴァイバルする戦術が展開される。それはホームの周囲にある異質な権力に巻き込まれながらも不断にそれらの困難と交渉することに他ならない。そこでのやり方はある方法が失敗すれば、全く反対のやり方を選択しなければならないという、一種の折衷主義（eclectism）を採用する。しかし、そのようなやり方を我々はイデオロギー的に日和見主義者（opportunist）であるなどと言うことはできないだろう。私は彼らの戦術は（まったく異質な対比ではあるが）一時的なホームを構築してそこでフィールドワークを展開する人類学者のそれと極めて類似するという心証を抱く [クリフォード 2002:33]。両者とも異質なものと折衝し、対話しながら、自己の存在を主張するからだ。

6. まとめ：俺に仕事を斡旋してくれないか？

インディヘナ、ラディノを問わず、この町の人々が、彼らと世界との関係について私に話してくれた対話の中でしばしば言及したのは、この外部世界

との「節合」(articulation)は、どんどん緊密になり、誰もその自動運動からは逃れることができないという現実についてであった。ここで6番目の人物に登場してもらおう。彼は私が差し出したインタビューの謝金を「君は友人だから」と言って決して受け取らなかった男性である。インタビュー当時58歳のこの男性——ドン・エウセビオとしておく——は次のように自分たちの生活の変化を説明した。

「自分たちは外部に出稼ぎにでて、さまざまな労働を手に入れたが、この10年の間にコスタ(海岸：太平洋岸のプランテーションの意)に働く人はほとんどいなくなってしまった。今でもコスタに働きにでる人はいるが少ない。なぜなら、今ではこの町の低地のコーヒープランテーションなどに働きにゆくことができ、コスタに働きにゆく必要がなくなったからだ。

最近ではジャガイモ、タマネギ、ブロッコリーなどの換金作物を植えるようになって我々の大きな助けになった。また、コスタに行っていたころ、人びとはコーヒーの栽培について知らなかった。現在コーヒー畑になっているところは昔はすべてトウモロコシ畑(ミルパ)であった。コーヒー栽培に関して、協同組合や講習などは行われたことはなく、それぞれが各自に栽培方法を憶えた。私[ドン・エウセビオ]の場合は、コーヒーの農場で現場監督として働いた時にその仕事を覚えた。今のコーヒーの収穫はこの町から、県庁のある町へ、そしてグアテマラ、さらには世界に広がってゆく。我々の収穫は世界へと鎖(*cadena*)のように繋がっているのだ」。

クチュマタン高原のこの町の人びとが直面していたこれらの現象(寓話)を私たちはどのように説明すればよいだろうか。援助団体が提供する計画への参加や海外労働移民といった一連の出来事を(1)家族の家計維持のために、彼らが主体的に選び取った新たな戦略と読むのか、あるいは(2)世界システムに節合する際の共同体の崩壊やダイアスポラのプロセスとしてみるのか。それ以外にもさまざまな学問的解釈があるだろう。これらの一連の学問的説明は、じつは我々の彼らとの関わりに関する政治的ポジションによって変わりうるだろう。だが多くの歴史実証主義——私は歴史フェティシズム

と言ひ換えたい欲望にかられる——はそのような枠組み（フレーム）を見ることを拒絶し、フレームの中だけを描くことに専念する。だが現在ではフレームそのものが自己主張することが明らかになった。それだけではない。フレームの中の登場人物たちもまた、人たちがそのように描かれてきた「理由」を説明してくれと要求している。（絵描きだと認知している）我々にこれらの問いの答えを要求する声はますます強まりつつあると言っても過言ではない。

ドン・エウセビオは、実際私との別れ際に次のように言った。

「自分は60歳前だが、労働者としてまだまだ体力があり、もう一花咲かせたい。君が日本に帰ったときに、グアテマラ人でも働ける就職口を探してくれないだろうか」と。

第三世界（開発途上国）の人びとの誰もが口にしそうな、このような懇願（request）に、第一世界（開発国）出身の人類学者はまもとに答えられず苦笑するしかない。私の顔もまさにそうだったのだろう。このような紋切り型のイノセントな懇願の中に、ボーダレス化したグローバル化が生み出した経済空間の暴力的な序列を私たちは見せつけられることになる。そして我々は、このような現象を学問的に説明する洗練した理論的語彙を山ほど持っている。しかし、先住民の彼らに、我々自身はどうして苦笑せざるを得ないのか、明快に説明することがいままになっている。私は、彼らとの果てしない対話の経験から、これらの先住民の諸体験を寓意——この場合は経済開発現象をもたらす意味＝メッセージ——として理解することを提唱する。これらのエピソードは、寓意の古典的意義であるところの〈自分自身を解釈する表象〉〔クリフォード 1996:186; Clifford 1986:99〕であったことを思い起こさせる。つまりこれらの寓意が自己表象する究極のところは、フィールドワークにおける調査者と被調査者のある種の関係性を暴く〈俺に仕事を斡旋してくれないか〉というメッセージの中に体现するのではないだろうか。

開発のエージェントが先住民民族に対して経済開発の重要性を説く時、このような寓意の創造やそこからみえる登場人物が属する社会の「感情の構造」〔ウィリアムズ 1983:48-50〕について気づき、そこから批判的に議論を始め

ることができるのは、畢竟、長期的なフィールドワークに従事することを経験の軸に据えた人類学者である。もちろん私はこのような役割をあらゆるケースにおいて買ってでる必要があるとは考えていない。だが、この一連の作業は、圧倒的に時間のかかる作業であるが、それに見合った実りを人類学者のみならず我々の対話の相手にも授けてくれるはずだろう。

謝辞

本稿に関する議論の一部は、マーガレット・ミード国際シンポジウム: "The Social Use of Anthropology in the Contemporary World," (October 28-30, 2004), Session 5, Culture and Development (Chair, Dr. Junji Koizumi), (国立民族学博物館) において、On Their Ways of Talking about 'Economic Development': A case study of a Mayan Indian Community of Guatemala という演題で発表した。また他の内容の一部(人びとの生活のエピソード)は、平成13~15年度文部科学省(ただし平成15年度以降は日本学術振興会)科学研究費補助金「中南米の民主国家建設における先住民文化運動の役割」(研究代表者: 太田好信・九州大学大学院教授) 成果報告書、2004年3月、における拙論「グアテマラ先住民文化運動に関する文化人類学的省察、22pp.」で発表したものと重なるものがある。

本稿で用いられた資料は、平成8年度文部省(当時)科学研究費補助金「グアテマラ観光地における文化創造と階級・人種・性差意識の民族誌」、平成10~12年度同研究費補助金「グローバル化におけるグアテマラ国家ナショナリズムと汎マヤ・エスニシティの形成」ならびに平成13~15年度文部科学省(ただし平成15年度以降は日本学術振興会)科学研究費補助金「中南米の民主国家建設における先住民文化運動の役割」(研究代表者はこれまた太田好信教授)に依っている。これらの諸機関に対してお礼を言いたい。また研究代表者である太田好信先生をはじめとして共同研究者の諸先生方には、大変お世話になりました。また今日にいたるまでグアテマラの調査地や日本の職場においてお世話になっている知人・友人たちにも謝意を表したい。Chijonta tey!, ¡ Muchisimas gracias!, そして、どうもありがとう!

文献

ブルデュ、ピエール (Bourdieu, Pierre)

1993 『資本主義のハビトゥス』原山哲訳、東京: 藤原書店。

クリフォード、ジェイムズ (Clifford, James)

1996 「民族誌におけるアレゴリーについて」(橋本和也 訳)『文化を書く』所収、Pp.183-226、東京: 紀伊國屋書店 (Clifford, James and George E. Marcus eds., 1986:98-121)。

2002 「旅する文化」(有元健 訳)『ルーツ: 20世紀後期の旅と翻訳』所収、Pp.27-70、調布: 月曜社。

Clifford, James and George E. Marcus eds.

- 1986 Writing culture : the poetics and politics of ethnography. Berkeley:University of California Press.

池田光徳 (Ikeda, Mitsuho)

- 1997 「商品としての民族・文化・定期市－グアテマラ西部高地における民族観光－」『市場史研究』17:93-99.
- 1998 「暴力の内旋－グアテマラ西部高地先住民共同体と経済－」『文学部論叢』60:59-90.
- 2000a 「『医療と文化』再考－グアテマラにおける医療人類学の再想像－」『思想』908 (2000年2月号) :199-218.
- 2000b Ethos, Community, and Violence: a Guatemalan highland community and global economy. 『ラテンアメリカ学会研究年報』20:89-119.
- 2002 「政治的暴力と人類学を考える－グアテマラの現在－」『社会人類学年報』28:27-57.
- 2004 「移民・難民・人類学者－グローバリゼーションとグアテマラ－」『トランスナショナルリティ研究：境界の生産性』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」報告書、Pp.115-128.、大阪大学文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科。

太田好信 (Ota, Yoshinobu)

- 2003 『人類学と脱植民地化』東京：岩波書店。

トゥエイン、マーク (Twain, Mark)

- 1997 『地中海遊覧記(上)』(The Innocents Abroad; or, The New Pilgrim's Progress) 吉岡栄一・錦織裕之訳、東京：彩流社。

ウィリアムズ、レイモンド (Williams, Raymond)

- 1983 『長い革命』若松繁信ほか訳、京都：ミネルヴァ書房。